

2017年6月 近畿旧友会ハイキングクラブ「燦歩会」例会（第460回）

「今年の滋賀は、膳所歩き(滋賀)」

日本列島南岸に沿って、巨大な二つの雨雲が雷を伴いながら東へ移動していました。6月25日（日）の朝の事です。梅雨の最中ですから雨は避けようのない事です。出来れば、歩いている間、土砂降りだけは勘弁してほしい、その日参加した10名（男性7名、女性3名）の正直な気持ちでした。それが、なんという事でしょう。結果的に、二つの雨雲の間を私たちは通り抜ける事になったのです。およそ4時間、時折傘を広げるだけで済みました。

今回は滋賀県在住の会員ご夫妻の提案で、膳所（大津市）を歩きました。先ずは、JR大津駅から琵琶湖岸に下り、しばらく「湖岸なぎさ公園」を歩きます。公園は大津港から南へ石山近くまでの約4・8kmにわたって整備されています。釣り、散歩・ジョギング、日曜日の時間を楽しむ方の姿が、多く見られました。



途中でこんなものに出会いました。釣り上げた外来魚を回収する箱です。琵琶湖では近年ブラックバスなどの外来魚が増殖して、本来の漁業に大きな被害を与えています。そこで外来魚を釣った場合、放さずこの箱に入れて欲しいというものです。被害はそこまで深刻なのです。



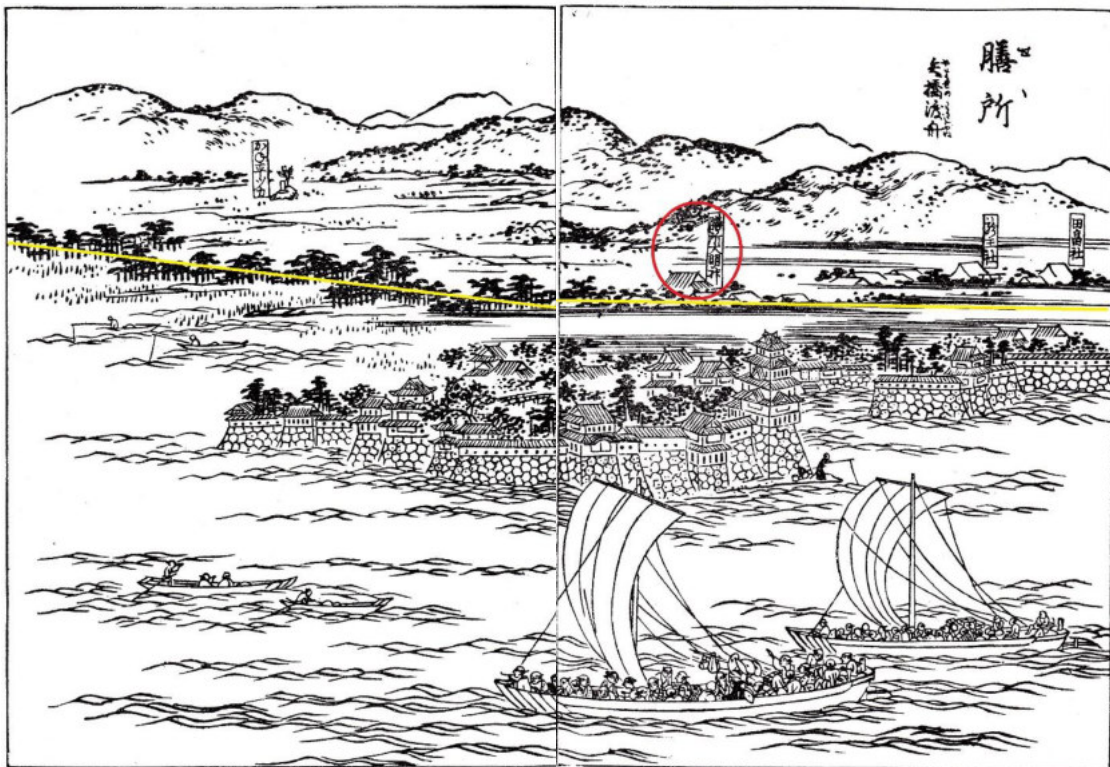
いつ雨が降り出すかも知れないので、取り急ぎ全員集合写真です。後方の比叡山系の頂きは雨雲に覆われています。竜宮城のような「県立琵琶湖文化館」は休館中です。

琵琶湖に向かってそびえ立つ常夜灯は、江戸時代末期、1845（弘化2）年に渡し船の目印として建てられ、近年ここに移設されたものです。高さは8m、台の部分に近江を始め大阪・京・尾張等、船仲間の寄進者の名前がびっしりと刻まれています。湖上交通の盛んな様と安全への願いを偲ばせます。



膳所城跡の公園で昼食休憩です。膳所城は、関ヶ原の合戦の跡、徳川家康の指示により、1601（慶長6）年築かれます。

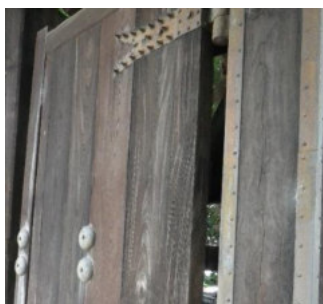
当初頻繁に城主が交替しますが、1651年本多氏が7万石で入部し、幕末までこの地を治めます。本丸、二の丸が湖上に突き出た水城です。城は琵琶湖の交通も、東海道の往来も見渡せる絶好の要地を扼しています。近江名所図会に描かれた膳所城の威容です。元来この場所は、膳所大明神の境内でした。城にするため、大明神は移転させられます。赤丸印の所、大きな屋根と膳所大明神の文字が見えています。画面中央を左右に伸びている松並木が東海道です。(黄色線)



城は徳川幕府の瓦解と共に、1870（明治3）年取り壊されて、今は跡地が残るだけになりましたが、門などいくつかの建物が、各所に移築されて、往時の姿を伝えています。

しばらく、城下を散策します。

先ず、膳所神社（大明神）を訪ねます。こちらの門は、城の二の丸～本丸間の城門を明治に移築したもので、国の重要文化財に指定されています。



扉も厚板を鉄板と鋳で固めた、城門のいかめしさを残しています。屋根瓦には城主本多氏の紋が刻まれています。

[蛇足の1](#)をご参照下さい。

膳所大明神の祭神は「御食津神（みけつがみ）」。食物をつかさどる神様です。天智天皇が大津宮に遷都した頃より、この地から琵琶湖の産物を宮中の食膳に供したそうです。「膳」を整える「所」、これが「膳所」の地名の由来で、氏神様も「食物の神様」なのです。では、なぜ「ぜぜ」と読むのか？ その謎は、[蛇足の2](#)で解明されるのでしょうか？

続いては、和田神社。こちらは大イチョウが見事です。
高さ24m、幹周り4.4m、樹齢600～650年との事。
琵琶湖を行き交う船の目印にもなっていたようです。
また関ヶ原合戦の後、敗れ捕らえられた石田三成が、護送される際、
このイチョウの木につながれ休息したという言い伝えもあるとか。
その頃は樹齢200年ほど。縛りつけるのに、恰好の太さだった
のかも知れません。(敗残の三成の無念さが偲ばれます)



篠津神社では、お祭りの準備風景に出会いました。
薪が炎を上げ、釜で湯がたぎっているようです。
氏子さんのお話では、この日は麦の豊作を祈る「麦湯祭」で、
間もなく巫女さんの舞もあるという事でしたが、時間の都合で
見る事は出来ませんでした。(残念!!!)

篠津神社の参道は東海道に面していて、そこからしばらく東海道を散策します。



東海道は、小さく曲がりながら、南へ向かいます。
江戸時代半ば、膳所の町は町家400軒、武家500軒、
町人人口3,100人ほどと記録されています。

格子の赤いのはベンガラでしょうか？
バツタリ床几（縁台）の残るお宅など、賑わった町の
様子が、随所に残っています。

この日の締めくくりは「膳所焼美術館」。

藩政時代、藩主の為のお庭焼きとして始まった「膳所焼」は、小堀遠州の指導を受けた
「遠州七窯」の一つとして、大名間の贈答などに珍重されたようです。
緑豊かな庭、美味しいお菓子とお薄をいただき、名品を拝見して、癒されるひと時でした。



いつもながらの蛇足で、失礼します。

蛇足の1 ケンペルの見た膳所

長崎オランダ商館の医師ケンペルは、1692-3（元禄5-6）両年、商館長の江戸参府に随行し、膳所の町を通っています。その印象を、このように記しています。

『この町は門の両側に、低いけれどもきれいな土手をめぐらし、家々は白く塗られている。……町の北側にある城は半分は湖に、また半分は市街地に囲まれて堂々として大きく、日本の様式によって高い四角形のたくさんの屋根と櫓がこれを引き立てている。……それから少し行くと門があった。その前に掛かっている幔幕には、上向きになった二つのクローバーの葉の間に、何とかいう文字の書いてある紋章が染めぬいてあった。』

（平凡社 東洋文庫 エンゲルベルト・ケンペル「江戸参府旅行日記」）

「門」は、町の南北を固めていた惣門の事。元禄時代の道中図（東海道分間延絵図）には、琵琶湖の水を引き込んだ堀、橋、門、番所が描かれ、なかなか厳重な警備です。門は暮れ六つ（午後6時）に閉ざし、明け六つ（午前6時）に開門。番所には目付がいて、人々の出入りをチェックしていたそうです。



「幔幕」は、その番所辺りに懸けられていたのでしょうか。ケンペルの見たのは、どんな紋所か？
左側は本多氏の定紋としてしばしば見られるもの。
右は膳所神社の門（重要文化財）の屋根瓦に描かれている本多氏の立葵紋です。

「上向きのクローバー…」と言われてみれば、そのようにも見えますね。ケンペルの言葉通りだと、この二つが組み合わせられたされたものだったのでしょうか？

蛇足の2 ぜぜ

難読地名ランキングに必ず入っている「膳所」。予備知識なくしては読めませんね。と思ったら、なんと「県民にも難しい滋賀県の難読地名」にも入っていました。『滋賀県に存在する難読な地名から10個、厳選しました！これが読めればあなたも立派な滋賀県民の一人！』というのです。他県民としても、心安らぐ事です。

とは言え、なぜ「ぜぜ」と読むのか？ どうも、これと云って決定的な回答は無いようです。一番単純なのは、「膳の所」→「ぜんしょ」→「ぜぜ」と訛ったという考え方でしょう。

「所」を「せ、ぜ」と読むのか？ 奈良県には御所（ごせ）という地名もありますし。それでは、あまりに単純すぎるという向きには、こんな考えもあります。この土地が琵琶湖に突き出た「崎」で、「膳の崎」が、いつしか「膳の前（さき）」となり、「崎」の由来は忘れられて、「ぜんぜん」と呼ぶようになり、「ぜぜ」になったと。

地名辞典の古典、吉田東伍「大日本地名辞書」でも、なぜ「ぜぜ」と読むのかは書いていませんが、「太平記には『是世（ぜぜ）』に作る」と記しています。太平記の建武3（1336）年の条にありました。

新田義貞が派遣した軍勢が、「供御の瀬・ぜぜが瀬二ヶ所に、大木を流し懸け…」警備を厳重にしたという記述です。

供御の瀬は今日の黒津で、瀬田川の少し下流、渡河可能な地点として知られていました。要は、この時代には、既に「ぜぜ」という呼び名になっていたという事のようにです。

謎の解けないままの蛇足、長くなり失礼しました。

* * * * *

ご 案 内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。

2017年度の予定

- 7月 石の宝殿と鶴林寺（青春18切符利用 兵庫）
- 8月 暑さを避けて休会
- 9月 コスモスの斑鳩三塔（奈良）
- 10月 吉備路の旅（1泊）
- 11月 京都一周トレイル（9年計画の第1回です）
- 12月 納会
- 1月 道明寺天満宮で初詣（大阪）
- 2月 どんづる峰を訪ねる（大阪・奈良）
- 3月 御坊と道成寺（青春18切符を利用 和歌山）

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。（電話 0743-20-4159）
ご一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

生島(おじま)幸弥